

私の大好きな言葉です、『^{さい}犀の角のようにただ独り歩め』は、仏陀の言葉（集）『スッタニパータ』の「第一 蛇の章 三、^{さい}犀の角」には、41句の言葉が並んでおりますが、その句毎に最後に付けられている言葉です。

まずは、評説について大谷大学のホームページより拝借します。

・・・ 標題の言葉は「犀の頭部にそそり立つ太い1本角のように、独りで自らの歩を進めなさい」という意味です。インドサイは群れではなく単独で行動することが知られていますので、「犀の（1本）角」という比喩表現は「孤独」を意味します。このように仏陀が孤独を勧める背景には「私達の悩みは人間関係から起こる」との分析があります。つまり、悩みを生み出す原因が「人の繋がり」にあるのなら、そこから一時的に離れてみることが心の成長に必要ということです。現在のように繋がり強化された社会では、繋がりからこぼれ落ちた存在が際立って見えます。人々は他者との繋がり求め、それが断たれた状態を不安や不快として感受します。ですが、実際のところ私達が孤独を感じるのは、周りの人に囲まれながらも「誰も私のことを見ていない」「誰も私に関心を持っていない」と実感する時です。1人でいることが孤独感の原因なのではなく、周囲との繋がりを実感出来ないからこそ孤独を痛みとして感じます。にも係らず、私達は1人になることを恐れ、なるべく他者と繋がろうとする結果、毎回同じ痛みを感受することになります。そのような私達に、仏陀の言葉は、孤独を怖れる必要はないと教えます。

さらに、同じ『スッタニパータ』の58番目の韻文では次のように謳われています。

『 学識豊か^{わかま}で真理を^{こうまい}弁え、高邁、明敏な友と交われ。。犀の角のようにただ独り歩め。 』

仏教では「悩みの原因となる対人関係から距離をとる」という意味での孤独を勧めると共に「優れた友との交流」を勧めます。一見して矛盾するように思われますが、そのねらいは真に独立した人格を形成するためにはどちらも必要ということです。そして、ここでの「友」は対人関係における友人に限定されません。例えば、大学生であれば自身がひたむきに学ぶ学問が「友」になり、社会人であれば自身が責任を持って励む仕事が「友」になります。つまり、自身を成熟へと導くものが総じて「友」と呼ばれるのです。・・・

以上を踏まえた私の感想と学びの実践について、以下に記述します。

その1；「ムレ・グル・衆と、それを束ねる何とか長」は魔物ぞ、警戒すべしです。

法人組織統制を離れた身近な地域社会・コミュニティにおける種々雑多の組織、諸々の集まり、何とか会・何とか趣味の会・何とかサークル・何とかグループ・何とかカルチャー等の「^(注)ムレ・グル・衆の“タマリ”」との人付き合い・係わりについてです。 ^(注)ムレとは群れのことです。グルとはグループのことです。衆とは烏合の衆のことです。

私の経験を踏まえたその「ムレ・グル・衆＝“タマリ”」の特徴・性質は以下（列挙）のとおり。

- ・「オレが一番偉い、俺が一番立派、俺が世の基準」の集まりである。
- ・指揮命令系統のピラミッド組織構造化する。それは支配者（強者）と被支配者（弱者）の関係を生き、時間差・若干の異動があれば固定化することを意味する。
- ・^{えせ}似非人物評論家——他人・仲間の陰口・悪口・恨み言・^{ざんげん}讒言・^{あくぼ}悪罵・^{ぼりざんぼう}罵詈雑言の限りを尽くして喋りまくるヒトが培養される。そのような性格を餌付けする人工栽培、人工養殖の土壌となる。
- ・その長（トップ・リーダー・部門長、代表者）は、万物の霊長足る人間を、命令口調を以って刻む

(仕切るなどという優しいものではない) ことに、そして私我を配下に刷り込むことに快感と、生きがいを感じる。だから長期間居座る者が表れる。それは配下の者は非人間化されたも同然となる。

- ・「集団同一規格化への共同行進」を強い、「仮想－北朝鮮への帰属化」を強い、「遠慮と妥協の養殖栽培ハウス」に住むことを強い、「ストレス製造機」の動力源になることを強いる。
- ・「ムレ・グル・衆」の中で囲い込み心理(画策)が作用し、別の「ムレ(派閥)」が派生する。いわゆるムレの入れ子が生まれる。
- ・人間生来の(本質的な)単独性を破壊して悲しいかな「つながり孤独」を生んで行く。
- ・長は、『絆』という美名を叫び、配下の者は『絆』という美名に酔いしれ、皆は『絆』という麻薬に侵される。
- ・長は、「同調圧力」強化・培養の主となって裏工作をする。

それら「ムレ・グル・衆と、それを束ねる何とか長」の空気感は雑踏・喧騒の中での一時的な高揚感を煽り、その性質は、『成熟へと導くもの』とは真逆に位置します。近年、若者に多いという「つながり孤独」とか、「中高年引きこもり」が社会問題化しているが、私に言わせれば「ムレ・グル・衆とその長」の魅力というものに一時は引き寄せられ、その反動で――物事には必ずある一長一短、短所・反作用(副作用)が露見したものです。昨今『同調圧力』という概念が用いられていますが、暗黙の脅迫・パワハラ雰囲気を作り、それに屈する、屈せざるを得なくなるタマリ問題の一面です。

その2；仏陀の『犀の角のようにただ独り歩め』から学ぶことです。

川柳風にすれば『孤(個)を立てて、個を磨きては、独華が咲く』です。『成熟へと導くもの』とは、自身の真我と対話し、孤(個)を立て、個を磨くべく探し求める人生道に励むことから生まれ、育まれるものです。私に孤(個)を立て、個を磨き、自己確立を図るための試行錯誤・右往左往の中で、押し出されて来た言葉の一つです。今の私は、去ること67歳からこの68歳までに全ての「ムレ・グル・衆の“タマリ”」を脱会清算し――理由は、タマリは窮屈だから――、この自身の真我を友に、他者との係わりにおいては、対等互惠(敬)の心が滲み出る真に交響出来る人のみと、“**(※1) 水と油**の如く、**(※2) 塩水**の如く”の関係を以ってお付き合いしています。決して“**(※3) 砂糖水**”の関係にはしません。積極的にこんな環境を求めて自由を満喫しています。

(※1) 混合しても溶け合いません。人間性としては、“溶け合う”とは双方の性質が無くなって第三の

味・色になることです。いわば個性消滅です。「**水と油**は違うもの、しかし、**同器**に一緒になるもの**溶けず**に一緒に収まるよ、収まるものの互いに別よ」です。娑婆の人間では、一般的には、水と油は反発し合って仲が悪い関係を比喻します、呉越同舟・玉石混交も良い意味では使いません、私は逆転の発想という訳ではないが、むしろ、そのような関係性こそ望ましい人間観ではないかと思えます。まさに対等互惠(敬)と相互尊重の精神に繋がるではないか、と肯定的に捉えています。

(※2) 一期一会精神の比喻表現です。私は素晴らしい人と会ったとしても、会った時のその時間帯は一期一会と心得て、貸し借りの感情が残らないように、しがらみを作らない、腐れ縁とならないように、その場・その時限りとし“後は雄々しく美しくさようなら”とする心を傾けて向き合うこととしています。相互の関係性を離れた(別れた)ら、つまり、水を蒸発させるとどうなるのか、真っ白いサラサラとした元の塩が復元されます。それは、自己確立された“あなたは貴方、私はわたし”

でそれぞれが元の姿——独華満開の日常に復元することを意味するのです。

(※3) とても仲の良い、親しい関係に一旦隙間が生ずれば、少しのすれ違いが生ずれば、つまり状況変化があれば、とても醜い憎しみに変化します。砂糖水はとても甘く皆が欲しがりますが、その水を蒸発するという変化が起きると、あの純白の砂糖は汚く醜い炭化炭^{すみ}に変化するのです。水は砂糖を溶かし、砂糖は水に溶かされ、砂糖を復元出来ない、むしろ第三の物質に変化してしまったのです。人間性としての砂糖水は没個性・ドロドロの関係の比喩表現です。

その3 ; 「ムレ・グル・衆とその長」のようにアンポンタンやヤカラとデグスケが徒党を組み、狐狸^{こり}妖怪^{ようかい}が暗躍するような欲界・コミュニティとの縁を断ち切って、近付かない積極意志を以って防衛する他はない、独華を咲かすことこそが人生最善と分かって来ました。「親しい」の程度は人によりけりですが、私には世間一般で謂われる親しき友はおりません、そのような親しき友を作りません、そのような親しき友を作りません、そのような親しき友を求めません。私に必要なのは、対等互惠（敬）を以って結ぶことの出来る人のみと1対1の関係です。もちろん、その有志といえども集まって、強い絆の「ムレ・グル・衆＝タマリ」は作りません。作るにしてもユルユルの関係性を保持します。このような自己真我の確信で生きたいと念じています。

自分に言い聞かせている自由への願望フレーズがあります。

「自由が至高のお友達、内なる真我が真師^{しんし}なる」です。

「自由自在と融通無碍は、真我の血潮の盃なる」です。

「**孤を立ててその個を磨くその術は、日々に迷わず真我と対話**」です。

真我とは、書いて字のごとく、真＝「まこと」の我＝「われ」、つまり、格別の意識で細工することなく、今この時に湧き出る本当の自分のことです。真我は次の要素を内蔵しています。これを私は「仏性」と称しています。

- ・人間意識の最高次元
- ・仏教でいう悟り・解脱の世界
- ・宇宙意識
- ・神意識
- ・仏心と慈悲
- ・完全調和
- ・無限の愛
- ・真如
- ・実相など

しかし、所々で持ち出すが、本当の私は、この「仏性」と真逆の「魔性」が同居^{どうご}しています。後期高齢者になった私の知友人に接すると、ほとんどが“この歳になると虚心坦懐に話せる少数のお付き合いでよい。”と言われます。あの世に逝く時は孤独の一人、その準備段階に入ったのです。

(end)